明るい選挙の広報誌

私たちの広場

2005 1月号

特集◆
参加意欲を高める研修の意義と効果

No.280

財団法人 明るい選挙推進協会

平成17年1月15日発行　通巻760号

寄稿

初夢に託して

仙台市明るい選挙推進協議会会長
渡邊 勝 さん

プロフィール　わたなべ・まさる

平成4年に宮城県立高等学校教頭を最後に教員を退き、平成11年から4年間、仙台市選挙管理委員会委員長職務代理者を務め、平成16年に仙台市明るい選挙推進協議会会長に就任。

厳冬のヒマラヤ、アフリカ等7回の海外遠征登山隊長や文部省登山研究所実技講師等を歴任し、現在、宮城県山岳遭難防止対策協議会直轄救助隊長、全国高体連登山部会顧問として活躍中。

恭賀新春。

新年早々、よくよくの戯言になりますが、ご容赦願う。性善説を引き合いに出すまでもなく、誰しも

住みよい町
よりよい社会
すばらしい環境

を願う心は、何時に変わらぬ庶民の願いであると思う。

車道で右折する車を対向する直進車やトラック等が停車して右折させてくれる行為を、よく目にする。また、車窓のすばらしい風景等を知らせる同行者、テレビの気を引く画像や、すばらしい映像を知らせてくれる、ちょっとした心づかい。

そして、ついつい、さりげなく自然に知らせてしまう人々も多いのも世の中だと思う。

スポーツにしても然り。そのフェアな真摯な行為は、当然、感動を与えてくれるし、ともすれば、沈みがちな心、逆境の方々に希望をおしみなく与えてくれるのである。

他人の幸せを喜ぶことのできる人は最高の人間性の持ち主であると信じておりますが。いずれにしても、他君が喜ぶ姿をみて自分も、素直に喜べる心根、ヒューマニズムは誰しも保持していると思う。

しかし、なかなかに、そのいわば「キッカケ」、機会がないと、ついつい引き籠もってしまい、結局は、とどのつまり、自分に都合のいい解釈、自分に負けてしまい、終わってしまって、おしまいとなる。

今、ここにキッカケ、ドアは開いている。

喜びをかみ締める体験をしてみませんか。

カタルシスとは古代ギリシア時代に生まれた言葉だそうだが、感動すれば自分の血液は浄化する。自分のためになる、これ「カタル

シス」也。

さて、全国的に二〇歳代から三〇歳代の低投票率が危惧されている。「学都」として有名な仙台市もご多分に漏れず、昨年七月の参議院議員選挙の二〇歳代推定投票率は、二八％強と、全国平均を下回る結果に終わっている。

選挙は民主主義の根幹であり、将来を背負っていく若年層の低投票率を何とかしていくこと、これこそが、今の最も重要な課題であると考えている。

そこで仙台市明るい選挙推進協議会では、今年、組織の見直しを行った。具体的には、協議会委員としての二〇歳代の方の加入や、協議会の中により効果的に啓発事業を展開するための「企画運営部会」の設置である。

さらに当市では、若年層の低投票率の問題について、市民の視点からも何とかしていこうと、昨年三月に「選挙サポーター」を公募した。これは「当事者である若年層の意見を聴取すべき」「当事者たちが選挙啓発活動をすることが必要」という若い方自身の意見から、選挙管理委員会がスタートさせたものである。

選挙サポーターはボランティアとして、委員会の事業への協力や、独自事業を展開することで、選挙啓発に寄与していただく地域の協力団体である。

より多くの方に「選挙」について考えていただくことは大変すばらしいことであり、このような協力団体が結成されたことは、我々にも良い刺激を与えてくれるものと思う。このため協議会としても、五名の選挙サポーターに「企画運営部会」に参画いただき、さっそく新鮮なアイデアを出していただいている。

ところで募集に当たり、活動費用は個人負担、無償というこの選挙サポーターに、果してどれだけの反響があるのか不安もあった。反面、政治的無関心が叫ばれている昨今とはいえ、「誰しも何か社会の役に立ちたい想いがあるはず」という期待感も強かった。蓋を開けてみると、思惑どおり若い方から年配の方まで、八〇名の応募という大きな反響があった。

昨年八月二四日、午後六時半から開催された第一回選挙サポーター会議に同席した。大学生や社会人、主婦に交じり、会社社長という方もいた。

「街頭啓発のとき『ばーか』と冷やかされショックだった」「自分たち若者は政治に関心がないわけではない。低投票率には政治家たちにも責任がある」…。会議は午後九時を超えても終わらず、若い方も年配の方も熱く議論されていた。

協議会が実施してきているこれまでの啓発活動に対しても、「広告デザインを選ぶときには、若者の意見を反映させるべき」「よりターゲットを絞った街頭啓発のため、配布時間や場所を検討してはどうか」など、なかなか鋭い視点からの指摘をいただき、いろいろと参考になった。

一一月には第二回会議が開催され、今月、選挙管理委員会と協議会が実施する啓発イベント、映画「一票のラブレター」上映会の運営に協力をいただけることとなった。さらに、イベント申し込みには携帯メールを活用すべきであるとか、立候補者受付で使用する抽選機や、選挙七つ道具などを会場内に展示したいという提案もいただいた。

また、誕生したての選挙マスコットキャラクターの活用や、小・中・高等学校生に対するアプローチの仕方、ＩＴ活用による啓発等を検討するため、チームを編成することになったとのことで、とても心強い。選挙サポーター事業は、まさに市民協働という、時代に合った手法であるという手応えを感じた。

選挙サポーターはまだ発足したてであり、どのような団体に育っていくのかは不透明な部分もある。しかし、それだけに多くの可能性があることも確かである。協議会としても活動に協力してもらうだけではなく、サポーターと共に育っていきたい。

選挙サポーター。カタルシスなのか、何故か参加する方々の目が生き生きとしている。血液が浄化されている証拠なのだろうか。

特集

参加意欲を高める研修の意義と効果

ワークショップの積極的導入

国民一人ひとりの政治に対する関心を高め、有権者の政治意識の向上を図るためには地域における地道で、継続する活動が必要です。情熱を持って地域での活動に取り組むリーダーの養成と組織化は明るい選挙推進運動の出発点です。この意味で明るい選挙推進協会が取り組む「研修」は運動を進める上で重要な役割を担っています。〇四年度には話し合い学習の手法を取り入れたディベートやワークショップ主体の研修を積極的に導入することで研修を活性化しました。これによって参加者が話し合い活動のリーダーとして活動していくために必要な基本的な知識や技能を身につけることを目的にしています。

※ワークショップ

米国で一九二〇年代に生まれた体験型の講座で、参加者が自主的に参加する方式の研究集会や、演劇など芸術分野の創作工房という意味があります。「所定の課題についての事前研究の結果を持ち寄って、討議を重ねる形の研修会」（広辞苑）を指しますが、特に事例や実践に基づいて具体的に共同討議や共同研究を進めていく場合にもこの表現を使い、進め方にルールはなく自由な発想で実施できることが特徴です。

明るい選挙推進運動は全国に約二、八〇〇協議会のネットワークをもち、一二万人の人がボランティアとして参加しています。一九五二年に(財)明るい選挙推進協会の前身である公明選挙連盟が結成されて以来、一貫して三ない運動や明るい選挙の推進に取り組んできました。しかし、明るい選挙推進運動そのものを知っている人は有権者の三割程度に落ち込んでいます。それを反映するように、さまざまな選挙の投票率が低下するなど、明るい選挙推進運動を担う関係者が歯がゆさを感じざるを得ない状況が続いています。

常時啓発に欠かせない研修事業

「投票率のアップをはじめとする明るい選挙推進運動は、選挙時のキャンペーンだけでは解決しない。常時啓発が不可欠になっている」と各地で指摘されるように、日常の取り組みを通して政治学習を継続することの大切さが訴えられ、常時啓発の必要性については広く意見の一致をみています。明るい選挙推進協会が実施する常時啓発事業には、出前講座、話し合い学習、啓発ポスターコンク

ールの作品募集、啓発資材の配布、有権者になった新成人に対するメッセージの発信などがあります。その中でもとりわけ重要な事業が、今回特集で取り上げる研修事業です。

明るい選挙推進協会は、各自治体で活動している明推協の委員、女性、地域、青年リーダーなどを対象にした研修会を毎年行ってきました。研修の狙いは、それぞれが活動する地域社会の中で、どのようにすれば明るい選挙が理解され、実現するか、そのための糸口を見つけることにあります。また、所属する明推協の組織の活性化なども研修のテーマにしています。

カードの分類・整理に熱を帯びる女性リーダー養成研修（九州ブロック、佐賀市で）

各地の明推協は、自治会、町内会、公民館、青年団、女性会、老人会、社会福祉関係団体、農協、商工会といった経済団体、さらに大学、高専など教育機関、新聞・テレビなどのマスコミ、学生・ボランティア組織、そして選挙管理委員会を含む地方自治体といったさまざまな関係者によって構成されています。明推協はまさに、地域の各層・各年齢の参加者によって運営される組織といっていいでしょう。

都道府県選管も研修に協力

協会では委員のスキルアップを目指す研修会を、都道府県明推協と都道府県選管の協力により全国七ブロックで実施しています。

明推協の委員として、地元で話し合い学習の進行役を任された場合のコーディネーターとして、話し合いを上手に運営することが目的です。さらに都道府県、市区町村においても研修が行われています。

ブロックごとの研修は広域的に明るい選挙推進運動の担い手が集まり、各地の活動で積み上げた体験などを情報交換することで、地域における明るい選挙推進運動の活性化につながると期待されています。また、互いに運動の成果を検証でき、委員が自分自身の活動を見直し、活性化するきっかけにもなると評価されています。

話し合い学習の手法を体験

その研修が、〇四年度から内容を充実させました。技術的な内容については、本誌の連載「ステップアップ！『話し合い学習』活動」で紹介しているのでご参照ください。例えば、ブレインストーミング（創造的思考法の代表的な手法）によるグループ討議で共通テーマについて議論し、課題や解決策をＫＪ法を用いてカードに記し、分かりやすく整理していく手法を導入しました。参加者全員が一〇人以下のグループに分かれ、年齢や性別を問わず実際に体験する形式で研修を進めます。

グループ発表を真剣に聞く青年たち（東海・北陸ブロック青年リーダー養成研修、名古屋市で）

「今年度初めて明推協の委員になったので参加しました。弘前市老人クラブ連合会の副会長を務めていますが、若者の投票率が低いというだけでなく、高齢者の生活が政治と密接に関係があるので、高齢者も政治に関心をもち続ける必要があります。研修に出て、公民館活動を通して選挙に行くことを呼びかけていきたいと感じました」（青森県弘前市明推協常任委員・木村留次郎氏）、「成人式でパンフレットを配ったり、職場を訪問して若い人たちに投票を呼びかけていますが、効果ははっきりしません。国民全体の政治への関心が薄くなってきているのでしょうか。二〇年間も明るい選挙推進運動に関わっていますが、研修で若い参加者から若い人の意見をもっと取り入れて欲しいといわれ、とても参考になりました」（岩手県北上市明推協副会長・渡邊満子氏）といった新鮮な感動や新しい発見があったという声

が受講した参加者から寄せられています。

明るい選挙推進運動の原点回帰に重要

明るい選挙推進協会常務理事の平林忠正氏は研修の意義について次のように話しています。

「明るい選挙推進運動を知っている人の割合は最近の調査では回答者のおよそ三〇％です。かつて公明選挙運動の周知度が九〇％を超えていたことを思い起こすと大変残念です。運動を取り巻く状況は、有権者の政治離れや国・地方の財政難もあって厳しい状況ですが、もう一度原点に返って運動の意義や必要性を考え、エネルギーを結集していく上で研修の活性化は極めて大切なことだと考えています」

研修の重要性と必要性は、ますます大きくなっていると考えられます。今年度、明るい選挙推進協会が主催した研修事業の概要は次表のとおりです。たとえば、活性化研修では明推協の必要性をディベートで論じた後、明推協の活性化策をＫＪ法で討議しています。

【明るい選挙推進協会主催の研修会】（04年度）

研修会	参加者数	グループ討議テーマ	討議方法
（1）市区町村明推協会長等	116	明るい選挙推進運動を活性化するためにはどうすればよいか	ＫＪ法、特性要因図法
（2）女性リーダー養成	106	明るい選挙推進運動をどう進めていくか／明るい選挙と地域づくり、ワークショップによる合意形成～地域づくりのための話し合い講座～	ＫＪ法、グループ討議
（3）コミュニティリーダー養成	69	明るい選挙推進運動をどう進めていくか／明るい選挙と地域づくり、ワークショップによる合意形成～地域づくりのための話し合い講座～	ＫＪ法、グループ討議
（4）明推協組織・活動活性化	158	今日でも明るい選挙推進運動は必要である（肯定、否定）、明推協活動を活性化するためにはどうしたらよいか	ディベート法、ＫＪ法、グループ討議
（5）青年リーダー養成	135	若者が政治・選挙に関心を持つためにはどうすればいいか、人口減少社会の到来は歓迎すべきである（肯定、否定）	ＫＪ法、ディベート法

※参加者数は、04年12月現在の数です。

研修会レポート

明るい選挙推進協会は毎年、北海道・東北から九州までの七ブロックで約三〇回の研修会を開き、約一、二〇〇人が参加しています。参加者はＫＪ法、ディベートなどを実践し、話し合い学習を体験しています。その中から、三ブロックで行われた研修会を報告します。

市区町村明推協会長等研修 女性リーダー養成研修 コミュニティリーダー養成研修（北海道・東北ブロック）

合同研修でＫＪ法を体験

北海道・東北ブロックでは、〇四年一〇月一二～一三日、青森県八戸市で「市区町村明推協会長等研修・女性リーダー養成研修及びコミュニティリーダー養成研修」を開催しました。

明推協会長等研修のテーマは「明るい選挙推進運動をなぜ活性化できないのか」、また女性・コミュニティリーダー養成研修は「明るい選挙推進運動をどう進めていくか」をテーマに討議しました。討議はスムーズに意見が交わせるように小グループに分かれ、ブレインストーミングを活用したＫＪ法で、二日間に計四時間かけ議論しました。

研修は、講師の個性によって展開そのものが変化します。例えばあるグループは、まず講師の渡部一清氏（青森県明推協常任委員・小学校校長）がジャンケンゲームを行ってメンバー同士を和ませ、情報の共有を図りながら、参加者が本音で意見を出し合う雰囲気をつくりました。別の講師は「名札の氏名を、自分が呼ばれたい名前に書き換えてください」と参加者の緊張をほぐしました。

講師の渡部一清氏のアイデアで和やかムードを演出するグループ討議参加者（北海道・東北ブロック女性・コミュニティリーダー養成合同研修、青森県八戸市で）

グループ討議で課題を分類・整理

グループ討議は一グループ八人前後、ラウンドテーブル・ディスカッション方式によるワークショップ形式で実施されました。手順は初めに「明るい選挙推進運動はなぜ必要か」のテーマについて、参加者全員がその理由を三つずつ考え、各自で白色カードに一つずつ書き込みました。次にカードに記入された項目が明るい選挙推進運動にとってなぜ必要なのか、記入した本人が説明し、話し合いました。そして全員で内容別にカードを分類しました。一通り終えると、青年層や高齢者層など一定の年齢、性別といった対象になる集団に対して、どうすれば理解してもらえるのか論議しました。

議論が出尽くしたところで運動のすすめ方の検討に入りました。各人が明るい選挙推進運動を推進するために有効な方法を三つずつ考え、参加者がピンク色のカードに書き込み、進行係に提出。次に、提出した内容を記入した本人が説明しながら、また分類・整理しました。その際に何か欠落している内容はないか、討議した結果を再確認し、その結果を踏まえて、カードを「○」（すぐに実行できる）、「△」（修正をして実行に移す）、「□」（検討を要する）、「×」（実行しない）に四分類し、再度グループのメンバー全員で論議しながら再び分類・整理していきました。

投票率アップのためのアイデアや実践事例を交換

明るい選挙推進運動が必要な理由として、「投票率を向上させるため」「住民の政治への参加意識を向上させるため」「候補者の明るい選挙に対する意識を向上させるため」が挙げられました。その実現方法として、①家庭や学校で社会の仕組み・ルールを教えていく、②日常的に色々な機会をとらえて投票の大切さを呼びかける。「JR駅構内に七夕を飾り、短冊に社会に対して望むことを好きなように書いてもらい啓発運動につなげるなど、投票意識の向上に結び付けています」（宮城県女性）といった実践事例が紹介されました。

さらに③広告などマスコミを使って選挙への関心を引き付ける手法は有効ですが、欲をいえばその広告を読めば政治が分かるような工夫をして欲しい、④日常生活や地域社会から政治が遠のいているイメージを払拭するため、機会あるごとに良い議員を選ぶ目を養うように呼びかけるーといった意見が出されました。

また、グループ討議で重要な鍵を握る進行係の技術（表参照）が紹介され、討議を盛り上げるだけでなく、限られた時間内にいかに効果的に議論を進めていくことができるか情報を交換しました。

進行係（司会）の技術	討議を進める中心的存在 参加者の取り次ぎ役
1 和やかな雰囲気をつくる	進行係がリラックスし、自由で和やかな雰囲気を作り出す
2 発言率を高める	発言が少ない人を誘導する。具体的なわかりやすい方向へ導き、堅苦しさを常にほぐす
3 話し合いの本務を守る	❶予め腹案を持って望む ❷段階ごとに問題を整理するよう工夫する ❸一人の長話を抑える ❹言葉は、はっきりと親しみやすくする ❺すべての参加者を公平に扱う ❻意見の対立は建設的に処理する ❼結論を急がない ❽助言者や記録者など他の人と協力する

女性リーダー養成研修（九州ブロック）

養成研修で女性もパワーアップ

一般的に投票率は女性の方が男性より高く、地方自治や地域社会に対して、育児や教育など子育てや家事など生活者の視点から問題を提起する力は、男性を凌ぎます。女性リーダーの育成は明推協事業にとって不可欠な事業です。一一月二〜三日、佐賀市で行われた九州ブロック女性リーダー養成研修は、女性パワーをよりアップさせるきっかけを提供しました。

生活者の視点鋭く、討議も白熱

今回の研修参加者が明るい選挙推進運動に関わった経験年数は、一年目から二、三〇年まで大きな開きがありました。

参加者は、全体で講話「政治の日常化学習と投票意識の啓発」（佐賀県明推協　西川黎明会長）と、説明「話し合い学習について」（佐賀県嬉

野町明推協　光岡大会長）などを聞いた後グループに分かれ、「明推協活動を活性化するにはどうすればいいか」をテーマにグループ討議に入りました。「明るい選挙推進運動はまだまだ知られていない」「運動・活動の成果を発表する場がない」「マンションが多く地域で話し合う機会が乏しい」など、常日頃感じていた不満や課題を活発に出し合いました。

ワークショップを取り入れた研修はグループメンバー全員に勢いをつけました。常時啓発に取り組んでも成果がなかなか見えない自分たちの運動に対して、悩みを語り合った場面もありました。しかし、買い物かごから地域社会のあり方を考えられる女性の視点は短時間で共感・共通点を見つけ出し、情報交換にも弾みがつきました。明るい選挙推進運動の経験年数の長短や年齢差、ライフスタイルの違いを感じさせない、活発な論議を生み出しました。

ＫＪ法で問題を分類・整理した結果、「人まかせではなく、自分が行動しなければいけない」「各地で研修を開き、明るい選挙推進運動の成果などを発表する場を多くして欲しい」「選挙時の立会人に若い人を起用し、選挙の大切さを知ってもらうきっかけにする」などの提案がありました。

また、講師の佐賀県嬉野町明推協会長の光岡大氏が、アメリカに住む娘さんから入手したアメリカの選挙事情を紹介し、共感を呼びました。その内容は、投票所で投票した有権者の胸に「I voted（投票したよ）」と書かれたシールを貼り、投票をＰＲしているというのです。明るい選挙推進運動に採用できないか、大いに話題になりました。

課題や解決策を箇条書きにしたカードを分類・整理しながらＫＪ法を体験する参加者（九州ブロック女性リーダー養成研修、佐賀市で）

ワークショップ活用で論議も活性化

ここで、この研修に参加した女性たちに、ワークショップなど話し合い学習の手法を取り入れた研修に対する感想や地元での活用方法などをインタビューしました。

まずは若い世代を代表し、鹿児島県枕崎市明推協の新人委員として、研修会に初めて参加した三〇代の城森清子さんの発言から紹介します。

城森さんは「地元で行われた一般市民による模擬議会への参加がきっかけで明推協の委員になりましたが、それまで明推協という組織があることさえ知りませんでした。研修を受けて多くの方と意見交換できてとても良かったですし、明るい選挙推進運動に対する意識が高まったと実感しています」と評価します。また同県出水郡の野田町婦人会会長を務め

話し合い学習がまちを活かす

青森県明るい選挙推進協議会会長　石崎宜雄氏

明推協の歴史を振り返ると、公明選挙連盟時代から話し合い学習が行われていました。学習する中で、現場で抱える悩みが分かってきました。話し合い学習は一人ひとりのニーズを探し出すための社会調査と同じ効果があります。

話し合い学習によって〝まち〟が変化した事例がいくつもあります。例えば、福岡県筑後市では、行政の成果に対してしっくりこないと感じていた女性たちが集まり、ここに陸橋が欲しい、橋が必要といった意見を出し合って女性が提案したまちづくりマップを作りました。このマップを見た市議会議員が、市議会で市長に何度となく質問するようになりました。このマップは公民館の入り口に掲げられていたのですが、市長がこれを生かして、市の基本計画、基本構想の原案に取り入れたといいます。

話し合い学習を通じて、下から盛り上げる力でまちを変えていく原動力になってほしいですね。そのためにも研修で話し合いを体験することは重要になっています。

る大下本靖子さんは「個人的には環境問題への関心が高く、地域では交通安全などの問題がより大切だと思われています。研修を受けて、女性の視点で明るい選挙推進運動を話し合うことも大切なことだと自信をもって思えるようになりました」と語りました。

研修参加の体験を地元に伝えたい

グループ討議の実践に対しては特に印象深かったという声があります。福岡県久留米市西国分校区女性学級の岡リツ子さんと田島スマ子さんは、開口一番「少人数で討議できて良かったです。『年寄りはなぜいけないのですか?年寄りの前に老いはなく、老いは若者の前にしかありません。それは、平均寿命（男性七七・八歳、〇二年）まで生きられるとしたら、今七〇歳の男性は約八年で、二〇歳の若者は五八年あります。でもそれは可能性であって、年寄りが七〇年生きたというのは事実です。事実は可能性よりもずっと重い。七〇年生きた足跡は、七〇年生きる可能性の道しるべになるかもしれません。老人を締め出すよりもっと活用して欲しい』といわれた西川会長の話が印象的で、帰ったら学級のみんなに必ず伝えたい」とやや興奮気味。また長崎県佐世保市の連合町内連絡協議会副会長の東満壽美さんも「初めはどうなることかと不安でしたが、グループ討議はとても楽しく良かったですね」と感想を語ります。

また、研修での体験の活かし方について、長崎市明るい選挙推進おたくさの会委員の徳島久子さんは「会員に研修の体験を報告しますが、何回か学習を積めば、自分でもＫＪ法を使ったグループ討議ができると思います」と自信になった様子。ただ「グループ討議を指導できるまでは指導に来て欲しい」（田島さん）と要望します。また鹿児島県中種子島町明推協委員の永浜三津子さんは「（島嶼地域などは）研修を受けられる機会が少ないので、出前研修などの方法で参加の機会を増やすように検討して欲しい」と提案します。

グループ討議で世代交流もスムーズ

また、多世代交流を評価する参加者もいます。佐賀県鳥栖市明推協委員の江副ミスエさんは「グループ討議の結果を発表させて欲しいと立候補する若い人（城森さん）がいて、頼もしかった。地元にも欲しい人材です」と指摘。同明推協副会長の今村悦子さんは「西川会長の話が素晴らしかったので、西川会長の講話を早速公民館事業に取り入れてもらうように頼みます。明るい選挙推進運動では、公民館をもっと活用して高齢者と若い人の交流を図っていきたい」と抱負を話します。

鹿児島県内の大学で組織する学生投票率一〇〇%をめざす会と連携する鹿児島県鹿屋市明推協の委員、新地サダ子さんは「研修に参加して次代の子供たちに政治学習の大切さを伝えることが、いかに大切か実感しました」と研修の成果を次の運動に

明るい選挙推進運動は切り開くもの、明るい選挙は学習で実現へ

佐賀県明るい選挙推進協議会会長　西川黎明氏

女性リーダー養成研修の中で、自己確認の方法論として学習の手ほどきになるＫＪ法が取り上げられていることに、大変興味を持っています。学習とは自ら求めて課題を立て、それが「変容」しなければ学習の意味を持ちません。今の社会で、文化的に豊かに生きていくには、政治課題、行政課題、住民課題を解決する必要があります。その課題を引き出すためにも学習は必要です。

明推協の取り組みは、活動ではなく運動です。活動は対象となる人たちのニーズを探りながら行われますが、運動は目標を突き詰め、切り開いていくものです。明るい選挙推進運動は当たるか分からない矢のようなものですが、矢を射ないと当たりません。かつて理想選挙の実践者で青年団の生みの親、佐賀の先達・田沢義鋪は「虚空に矢を放つ」と表現しています。

投票所が寂しいからという理由で若者が棄権するので、投票立会人に若い女性を起用してＢＧＭを流し、投票率が上がったら、それはバラエティショーです。それは方法論であって本質ではない。明るい選挙を実現するには時間がかかりますが、それも学習によって必ず実現すると考えます。

活かす決意を新たにしていました。参加者にとって研修体験は大きな成果をもたらしました。

青年リーダー養成研修（東海・北陸ブロック）

若者の投票率低下は若者自身の問題

二〇代の青年の投票率は平均の半分程度で年々低下している状況ですが、なぜ若者の政治への関心が低いのか、若者の気持ちが分かる若者自身が議論し、解決策を見つけ出す方が、より効率的です。〇四年一二月四～五日に名古屋市で行われた東海・北陸ブロック青年リーダー養成研修では、インターネットを利用したPR方法が論じられたり、名古屋市青年選挙ボランティアの活動が報告されるなど、活発な論議と情報交換が行われました。

名古屋市青年選挙ボランティアの活動状況を発表する丹羽さん㊨と吉澤さん㊧

名古屋市青年選挙ボランティアは選挙フェスタで明るい選挙推進運動を実践

研修では、明るい選挙推進運動の参加者による活動報告の時間を設けています。若者による活動報告が同世代の参加者に訴えるものが大きかったようです。

「イベントを通して選挙に関心をもつ人を増やしたい」。これが九八年にスタートした名古屋市青年選挙ボランティアが誕生したきっかけです。現在公募で選ばれた高校生から三〇歳までの男女三四人が参加しています。毎年一一月に開催される選挙フェスタの企画立案から実施までをメインに活動し、イベントを通じて、市民が選挙に関心を持ってもらうことを目的にしています。フェスタでは模擬選挙やコンサート、スタンプラリー、ゲームなどファミリーで楽しんでもらえるメニュー作りに心掛けています。「月二回のペースで会議を開き、学園祭の乗りで企画を考え、運営しています。彼らの頑張りがなければここまでできません」と名古屋市選管の吉川庸子さんは脱帽します。若者の課題を若者自身で解決しようという考えです。

青年リーダー養成研修会で活動状況を報告した丹羽亜衣さんは参加して七年目、吉澤由紀子さんは三年目で、二人とも大学生です。一見すると政治には無関心と思われるイメージですが、活動を報告したり、グループ討議に参加して発言する姿勢は、社会人以上に積極的です。

丹羽さんは「大学の広告放送研究会に所属していた時に青年選挙ボランティア募集のチラシを見て、イベントの司会をやりたくて参加したのがきっかけです。目立ちたがり屋だったということでしょうか？研修ではグループ討議に参加して、色々な人の意見を聞くことができて良かったですね」とにこやかに話します。丹羽さんの誘いをきっかけに加わった吉澤さんは「二〇歳を超えると税金のこと、社会や政治のことをそれなりに考えるようになりました」と活動による影響を指摘します。

実際の投票率はなぜ低い？

活動報告の中で紹介された、選挙フェスタ会場でのアンケート（二一一人が回答）結果では、「必ず投票に行く」「おそらく行く」合計で八六・四％でしたが、〇三年に行われた選挙の投票率は四〇・九％（名古屋市議会・愛知県議会議員選挙）と五三・九二％（第四三回衆議院議員選挙）。「実際の選挙と特定イベントのアンケート結果を直接比較することはできないでしょうが、選挙に行くべきだと考えている人が多いのに、実際には投票に行っていない状況が分かりました」（丹羽さん）と問題点を突きます。

〇四年七月に実施された第二〇回参院選の投票率は全国平均で五六・五七％でした。また二〇代前半が三一・五一％、同後半が三六・八二％でしたが、四〇代前半に五七・五九％となり、平均を辛うじてクリアした状況です。そのため研修では「若者が政治・選挙に関心を持つためにはどうすればよいか」をテーマに、原因と解決策をグループで討議

しました。

KJ法を青年団活動でも活用したい

金沢市青年団協議会のメンバー三人も研修に参加して、さまざまな刺激を受けた模様です。石川県青年団協議会（加盟三七団体、会員約二、〇〇〇人）は、社会運動の一環で明るい選挙推進運動にも取り組んでいます。会員の谷口みつるさん（看護師）は「KJ法を使ったことで、グループ参加者全員の意見が交換できて良かったと思います。それに他県の人たちと交流できて楽しかった」と素直に成果を語っています。岡田妹子さん（会社員）も「ただ講義を聴くだけでなく、意見を言い合える形式だったのは良かったですね。帰って青年団活動の課題について話し合う時、研修で体験したKJ法は活用できると思います」と話します。

資料を掲示してグループ討議の結果発表

グループはいい意味のライバル

戸田正隆さん（公務員）は、「初日には原因、二日目にはその解決策に分けて話し合うことができ、考えが整理できました。それにグループ間で対抗意識が生まれ、（KJ法の発表では）良いものを作ろうという雰囲気になり、グループで活動するのは有効だと思いました」とグループ討議の効果を評価します。また「年に一回ではなく、各地で頻繁に研修を行えばいいと思います」（谷口さん）という要望も出ています。

名古屋市青年選挙ボランティアの丹羽さんは「自分の中では当たり前だと思っていたことが、討議している相手にうまく伝わらないことがあって、説明のしかた一つでも勉強になりました。年に一度くらいは研修に参加してみたい」と感想も。「KJ法とブレインストーミングで、明るい選挙推進運動が抱える問題を個人と社会的問題とに分類しながら考えられたので良かったです。それに自分では思いもよらない話を聞くことができて視野が広がりました」（吉澤さん）と話しています。

いずれにしても、「どこも同じ問題を抱えていることがはっきりしました。今回のテーマは「若者が政治・選挙に関心を持つためにはどうすればよいか」なので、若者自身が考えた方がいい。我々の問題ですから」（戸田さん）という視点が妙に新鮮でした。

学生に社会参加のチャンスを

明るい選挙推進愛知県協議会会長　森正夫氏

若者の投票率低下の問題は若者固有の問題とそれ以外の問題の二重構造になっているので、一筋縄ではいかないと感じます。例えば、大学の現状を見ると、学生の社会活動につながる教育が少ないことに気づきます。

九〇年代に北欧とカナダの大学で学生生活を視察調査しました。大学にStudent Parliament Government（学生運営議会）と呼ぶ組織があり、学内外で学生が関わる問題を活発に発言していました。自治会活動も活発で、大学側の指導体制もしっかりしていました。行政も学生を社会の一員として位置付け、資金の支援さえも行っていました。

一方、日本では、一〇年前に比べ、例えば名古屋大学の学生の学ぶ姿勢は改善されてきました。しかし、広い視野で社会・政治活動に関心をもつことをサポートする体制をつくることが不足していたようです。京都精華大では、大学が取得した環境ISOの内部監査を学生に担わせ、社会的に責任ある業務に参加させています。社会的なことを学んだ方が学力も向上します。

企業のインターンシップが最近になって普及してきましたが、大学教育の中でも社会に接点がある活動を学生に任せることで、もう少し学生自身がしっかりするのではないでしょうか。

まんがでわかる
明るい選挙

第6回

地位利用による選挙運動の禁止

画／星野由美子

選挙運動は、本来、だれでも自由に行うことができるものですが、選挙の公正な執行を確保するため、次の人は、その地位を利用しての選挙運動を行うことはできません。

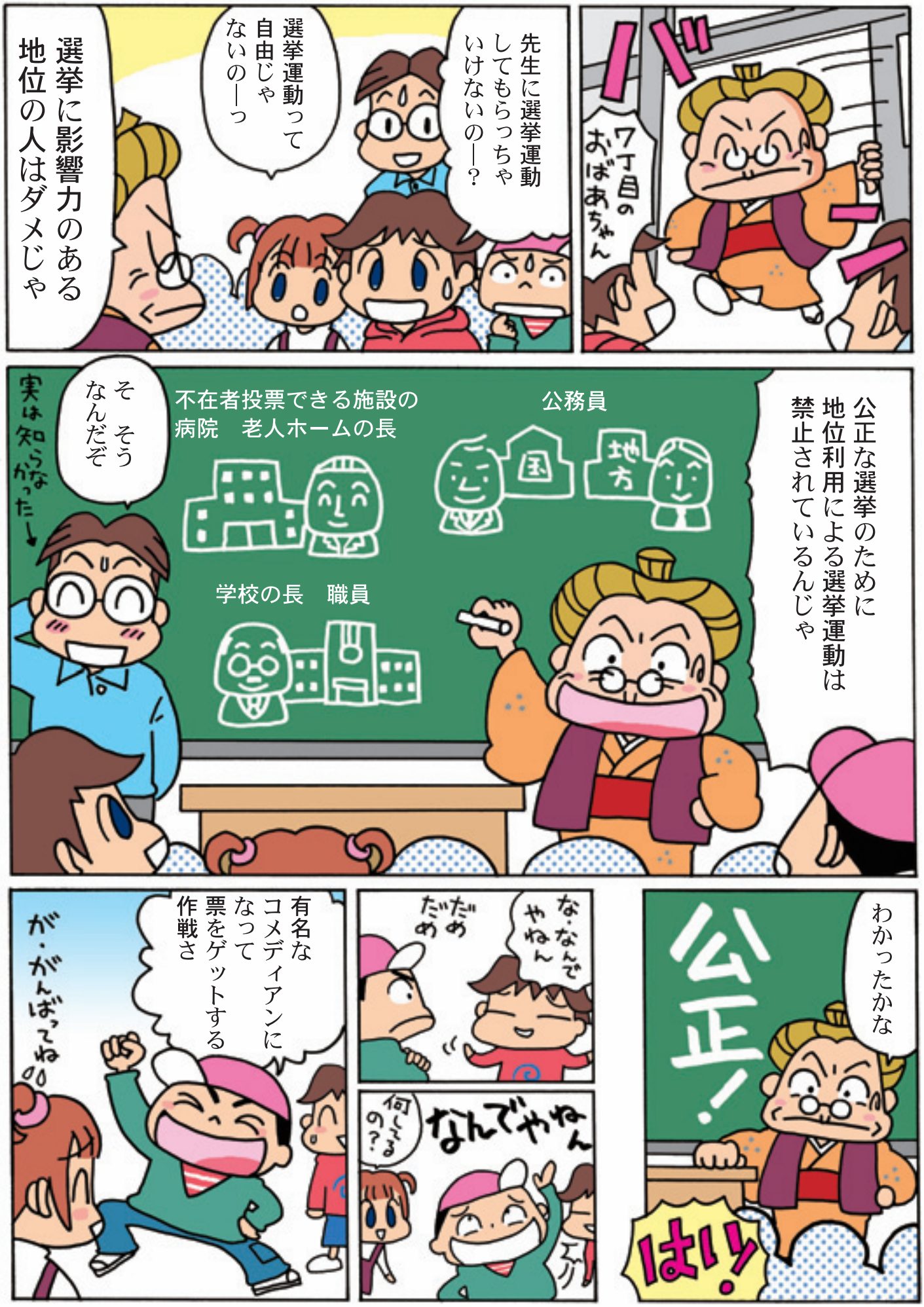
○国又は地方公共団体の公務員、特定独立行政法人の役職員や法律で定める公庫、公団の役職員など。

○学校教育法に規定する学校の長や職員。

○不在者投票のできる施設に指定された病院、老人ホームなどの施設の長など。

「地位利用による」とは、公務員などが、その地位にいるために選挙運動を効果的に行えるような影響力や利益などを利用する意味で、職務上の地位と選挙運動の行為が結びついている場合をいいます。

また、本来選挙運動に該当しないと考えられている立候補準備や選挙運動の準備的な行為もその地位を利用して行うことは禁じられています。


バ
7丁目のおばあちゃん
先生に選挙運動してもらっちゃいけないの―？
選挙運動って自由じゃないの―っ
選挙に影響力のある地位の人はダメじゃ
公正な選挙のために地位利用による選挙運動は禁止されているんじゃ
公務員
国
地方
不在者投票できる施設の病院　老人ホームの長
学校の長　職員
実は知らなかった
そ　そうなんだぞ
わかったかな
公正！
はい！
な・なんでやねん
だめだめ
なんでやねん
何してるの？
有名なコメディアンになって票をゲットする作戦さ
が・がんばってね

ステップアップ！

「話し合い学習」活動

連載第五回

積極的にアイデア、意見を出そう

会議、研修の中で利用されている手法の一つにブレインストーミングがあります。自由にアイデアを出し合うことで、ある特定の問題に対して解決策を見つけることができます。その他、ブレインストーミングを活用したKJ法などがあります。協会でも研修会で使っています。みなさん、「話し合い学習」でブレインストーミングを試してみましょう。

ブレインストーミングとKJ法

1 ブレインストーミング

(1)ブレインストーミングとは

ブレインストーミングは、一九三八年（昭和一三年）頃、アメリカの広告代理店の副社長であったアレックス・F・オズボーンが考案しました。「ブレイン（脳）で問題にストーム（殺到）する」という意味合いから名づけられ、今日では、最も広く知られた創造的思考法の一つとなっています。

ブレインストーミングは、一〇人以下のグループで行い、特定のテーマをめぐって、既成概念にとらわれずに自由にアイデアを出し合い、問題を創造的に解決するための討議方法です。一人では考えつかなかったような問題解決の糸口や新しいアイデアの発想につながります。

(2)ブレインストーミングの効果

・特定の問題に対して、その解決策を考えられます。
・参加者の創造的な問題解決能力が開発されます。
・グループの一体感や仲間意識が強くなります。

(3)四つのルール

ブレインストーミングの本領は、自由奔放にアイデアを出し合うところにあります。それを実現するために四つのルールが決められています。

❶**自由な発想**　どんなに変な思いつきだと感じても、思いついたままを率直に出すことが大切です。自分の思いつきに反省を加えることは禁物です。

❷**質より量**　何でも良いから、次々と思いついたことを出すことが大切です。理屈抜きでたくさん思いつきを出しましょう。

❸**批判厳禁**　他人の思いつきに対しても、良し悪し、可能・不可能という批判的な発言は一切しないでください。

❹**連想**　他人の思いつきでも、遠慮することなく、それを基にして自分の思いつきを発展させて出すことが大切です。

(4)発想のための練習

出そうと思ってもなかなか出てこないのがアイデアというものですが、アイデアを出しやすくするためのコツのようなものがあります。

まず頭の中を柔らかくしましょう。なごやかな雰囲気の中で、固くならずに、肩の力を抜いて、リラックスしましょう。そして、質より量と、気軽に思いつきをどんどん出していくようにします。

では実際のテーマでブレインストーミングを始める前に練習をしましょう。練習には身近なテーマを設定してみてください。一〇でも二〇でも、思いつくままメモに書き出してみましょう。

【例えば】
●「なぜおはようございますと挨拶するのか」
●「まちを活性化するにはどうすればいいか」
●「地球温暖化を防ぐにはどうすればいいか」…etc

(5)ブレインストーミングの進め方

ブレインストーミングは次のように進めていきます。

❶実施方法の説明

カード、サインペン、模造紙などを用意し、ブレインストーミングの目的と進め方を説明します。

❷テーマの設定

話し合うテーマを設定し、グループに分かれます。それぞれのグループで、進行役、記録係などを決めます。

グループに分かれてブレインストーミング

❸アイデア、意見の出し合い

四つのルールを守って、アイデア、意見を出し合います。進行役のもと、自由にできるだけ多くのアイデア、意見を出し合います。この場合、各自がカード（紙切れ、付箋紙など）に記入したり、記録係が模造紙に書き出したりします。

参加者がすぐにアイデア、意見を発表するのが難しいときは、はじめに少し時間をとって、メモ用紙に書き出してからそれを発表していく方法もあります。

❹グループ討議

出されたアイデアがテーマや目的に対して一面的に偏ったものにならないようにするため、全体を眺めることが大切です。意見を並べたり、並べ替えたり、組み合わせたりして新しい情報としてまとめ、アイデアを掲示してみます。

❺グループ討議の結果発表

各グループで発表資料などを模造紙などにまとめ、全員に見えるようにホワイトボードなどを使って、それを掲示します。

2 KJ法

(1)KJ法とは

KJ法は、文化人類学者の川喜田二郎氏が考え出した創造的問題解決の方法で、川喜田氏の氏名の頭文字をとって〝KJ法〟と名づけられました。

KJ法では、ブレインストーミングの要領で出されたアイデアや意見などを一枚ずつ小さなカードに書き込み、それらのカードの中から近い感じのするもの同士を集めてグループ化し、図解していきます。こうした作業から思わぬ発想が生まれ、解決に役立つヒントやひらめきが出てきます。

(2)KJ法の進め方

KJ法では、アイデア、意見が書かれたカードを収集して、グループ化し、一枚の模造紙にまとめます。そして全体を見ながら検討し、話し合います。これは次のような手順で進めます。

❶実施方法の説明

カード、サインペン、模造紙などを用意し、目的と進め方を説明します。

❷カードづくり

ブレインストーミングの四つのルールの要領で、思いついたアイデア、意見をカードに書きます。

あとでカードを内容ごとに分類するので、一枚のカードには一つの意見を具体的に書き、二つの内容を書いてはいけません。

また、グループ全員が読めるよう、サインペンなどで大きめに書きます。

❸カードの分類、集約

カードを書いた本人が意見を読み上げ、説明します。参加者はカードに書かれた内容を丹念に読み取り、内容が近い感じのカードごとに分類して、小グループにまとめます。

まとめるときに、カードを無理にどこかのグループに入れないようにしましょう。

❹見出しづくり

内容ごとに分けられた小グループに見出し（タイトル）を付けます。

❺図解化

関係のある小グループをまとめた中グループ、その中グループをさらにまとめた大グループと、次々にグループ化していき、模造紙の上に貼り付けます。

❻解決策

図解化されたものをじっくり眺めて、グループ間の関係性を読み取っていきます。全体について意見交換をし、文章化するなど問題の解決策を導き出していきます。

3 特性要因図法

(1)特性要因図法とは

KJ法と似ている手法に特性要因図法があります。

「調査・分析」「問題点の発見・解決」の基本的な方法で、問題（＝特性）の主だった原因（＝要因）を明らかにするものです。問題とその原因との関係を魚の骨のような図解にして分析していきます。

その図解が魚の骨の形に似ているので「フィッシュ・ボーン」と呼ばれています。

（2）討議の進め方

❶原因の究明とカードづくり

問題の原因について、ブレインストーミングで意見をたくさん出してカードに書きます。

あとでカードを内容ごとに分類するので、一枚のカードには一つの意見を具体的に書き、二つの内容を書いてはいけません。

また、グループ全員が読めるよう、サインペンなどで大きめに書きます。

❷特性要因図の作成

背骨となる太い矢印を模造紙の中央に書き、討議のテーマを記入します。

各人のカード（小骨）を同じ内容のカードごとに分類し、それぞれに見出しをつけます（中骨・大骨）。

次いで、背骨に向けて矢印で線を引き、それに沿って分類したカードと見出しを張ります。

❸解決策の話し合い

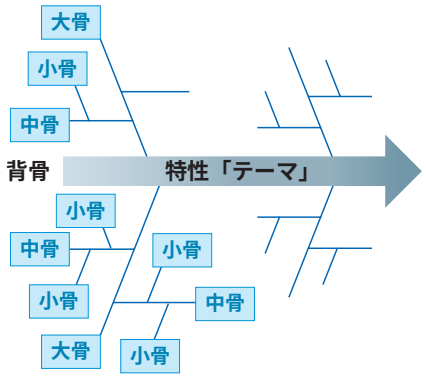
原因としてまとめられたいくつかの見出しに対する解決策を、ブレインストーミングを使って、たくさん出し、話し合います。

解決策の見出しを背骨の右側に記入します。

❹討議結果の発表

各グループで出された原因と、それに対する具体的な解決策を発表します。

【特性要因図の概念図】



❹解決策の分類

討議した結果を踏まえて、解決策として提出された意見を実行性の度合いによって分類するとより具体的に解決策が見出せます。

（1）○△□×

❶すぐに実行できるものは　↓○
❷修正して実行に移すものは↓△
❸検討を要するものは　↓□
❹実行しないものは　↓×

（2）色分け

提出された解決策の実行可能性について、書き出すカード（紙）の色分けでわかるように分類する方法もあります。

❶すぐに実行できるものは↓ピンク
❷修正して実行に移すものは↓黄色

参加者二九人が五グループに別れて意見を出し合う
「青年リーダー養成研修」

一一月二七～二八日、和歌山市で近畿ブロックの「青年リーダー養成研修」が行われました。

この研修のメインプログラムはグループ討議です。参加者二九人は五グループに分かれて、「若者が政治・選挙に関心を持つためにはどうすればよいか」をテーマに、ブレインストーミングとＫＪ法を使って原因・理由そして解決策を考えました。

【参加者の声】

●刺激になりました

大学生（二〇歳）

ブレインストーミングでは、ふだん思っていることを発言でき、自分の考えも整理できました。また、いろいろな人の考えを聞くことで、課題を客観的に見ることができたと思います。

●一人ひとり意見が言える

大学生（二三歳）

ブレインストーミングは、一人ひとりが意見を言える場だと思います。みんなの考えが聞けて、自分の意見と違う意見も受け入れられるようになり、また、他の人の考え方は新鮮に受け止められました。ここで得たものを持ち帰り、大学などで、友だちと話し合うことで草の根的な啓発ができそうです。

●自分の意見が言えた

大学生（二一歳）

少し不安もありましたが、自分の意見を話せていい経験になりました。自分の幅も広がったように思います。参加する前にテーマについて事前にもっと調べておけば良かったと反省しています。今度、チャンスがあったら、友だちにも声をかけて一緒に参加しようと考えています。

●違う意見でも批判はしない

大学生（二一歳）

ブレインストーミングは考えをまとめるのに有効な方法であり、リーダーになろうとする人には必要な方法だと感じました。今後、使えるところでは利用していきたいと思います。最初の説明で、違う意見を批判してはいけないと言われましたから自制しましたが、個人的にはもっと突っ込んで話し合いたいとも思いました。

●選挙に無関心な人も参加を

青年会（三〇歳）

選挙のことを話し合える数少ない場。日常生活の中ではこんなチャンスがないので、この場があることは素晴らしいことです。できれば選挙に関心のない方にも参加してもらいたいと思っています。参加者の構成にバラつきがあれば、もっと面白い意見が出るはずです。

【若者が政治、選挙に関心を持つためにはどうすればいいか】

〈カードに記された若者の声　第三グループ「一年三組」のものから抜粋〉

●関心を持たない理由・原因

無関心
- そもそも選挙に関心がない
- あまり興味が持てない

不信
- 汚職事件で政治に失望
- 政治家不信が無関心を招いている

経験
- 選挙に触れる機会がない

関わり
- 自分の一票がどうなるかわからない
- メリットが感じられない
- 選挙に行かなくてもいいという風潮
- 自分が投票してもしなくても、何の影響もない

制度
- 投票に行く時間がない
- 投票場が少ない

情報
- 広報不足
- 選挙に関する情報を得る機会が少ない

むずかしい
- 政治が分かりにくい
- 政治用語が分かりにくい

候補者
- 候補者は遠い存在
- 立候補者とは別の世界の感じがする

●解決策

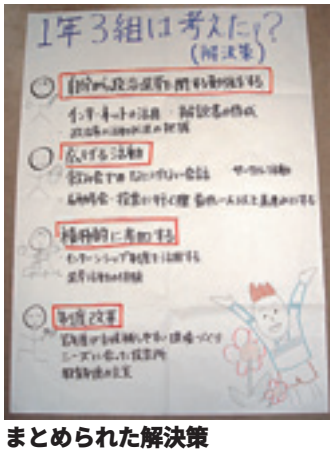
▼自分から政治選挙に関する勉強をする
- インターネットの活用
- 解説書の作成
- 政治家の活動状況の把握

▼広げる活動
- 飲み会でのなにげない会話
- サークル活動
- 研修会
- 投票に行く際、最低一人以上道連れにする

KJ法によるカードの分類、集約

▼積極的に参加する
- インターンシップ制度を活用する
- 選挙活動の体験

▼制度改革
- 若年層が立候補しやすい環境づくり
- ニーズに合った投票所
- 教育制度の充実



まとめられた解決策

アイスブレイク

研修を始めるに当たって

椅子に長く座っていると体が固まってしまいます。体をほぐすため、少し手を伸ばして背伸びをし、そして肩を少し回してください。

知らない人ばかりだと少し緊張します。そこで、安心しリラックスするために、一分間ぐらい、隣の方とお話してください。お互いに知り合うことで、緊張が溶けます。次に、背中に緊張が走っていると辛いので、まず一列目の方が振り向いて、後ろの方にご挨拶してください。次いで二列目の方、そのあと三列目の方と次々に振り向いて後列の方とご挨拶してください。

研修の間ずっと緊張しているよりも、最初に少しやわらかい雰囲気になって、頭をやわらかくすれば、話し合いを進めていけます。

これをアイスブレイクと言い、アイスブレイクとは氷を溶かすという意味です。リラックスすれば、さまざまなことに気づき、またそれを参加者と分かち合うことができ、学びがいっそう深まること間違いなしです。

（明るい選挙推進協会が実施した研修における講師、経田博子さんのお話から抜粋しました）

研修会参加者のアンケートから

アイスブレイクが大切

会社員（二八歳）

これまでにブレインストーミングは何度か経験していますが、やはり大切なのはアイスブレイクではないでしょうか。もっとお互いを知り合えたら、短時間でも話しがもっと深まると思います。

DATA

投票に対する考えと投票傾向

明るい選挙推進協会では、平成15年11月9日に行われた第43回衆議院議員総選挙における有権者の投票行動等について、20歳以上の男女3,000人を対象に意識調査を実施しました(有効回収率71.3%)。

問 あなたはふだん、選挙の投票についてこの中のどれに近い考えをもっていますか

◆投票に対する考え

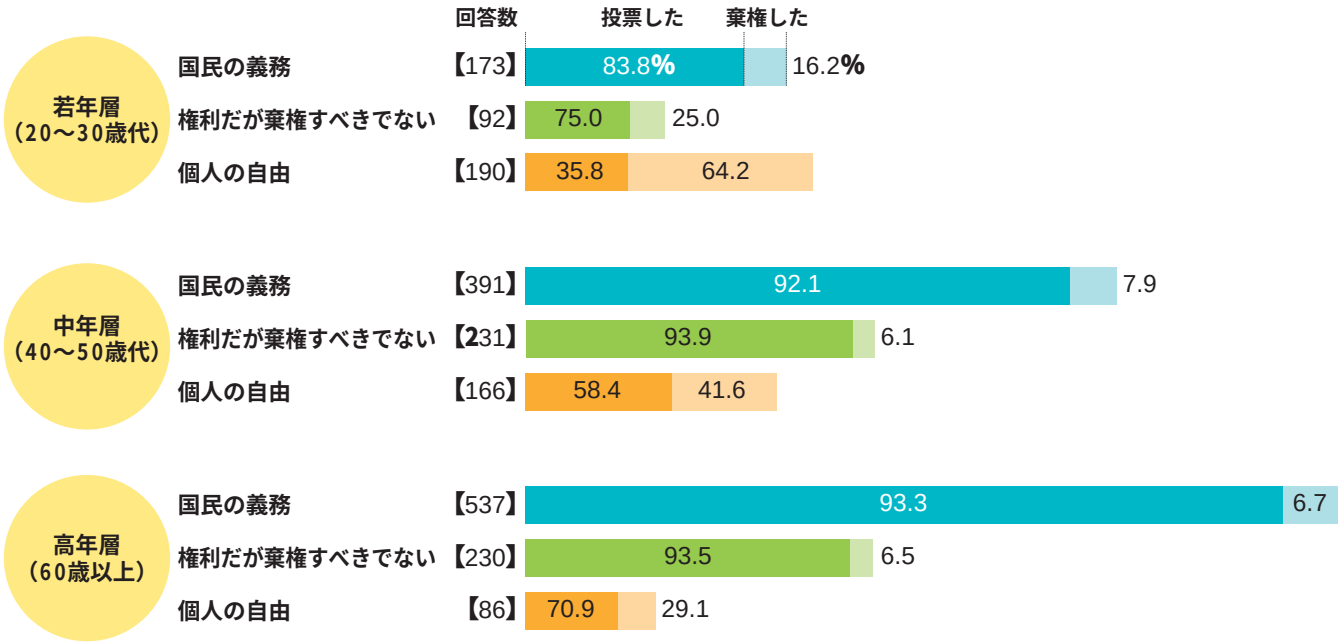
「投票することは国民の義務である」が51.5%、「投票することは国民の権利であるが、棄権すべきではない」が25.9%、「投票する、しないは個人の自由である」が20.7%でした。

◆投票に対する考えと投票傾向

投票に対する考えが、どの程度投票傾向に影響を与えるのでしょうか。衆議院選挙に投票したか棄権したかを、3つの年齢層に分けて、3つの投票に対する考え方別に分析しました。

例えば若年層で「投票することは国民の義務である」と回答した173人の内、83.8%の人が投票した、16.2%の人が棄権したと回答しています。

興味深い点は、どの年齢層も「投票は個人の自由」と考えている場合、投票傾向は下がりますが、年齢層が高くなると「投票は個人の自由」だと考えていても、棄権しないで投票する傾向が強いということです。



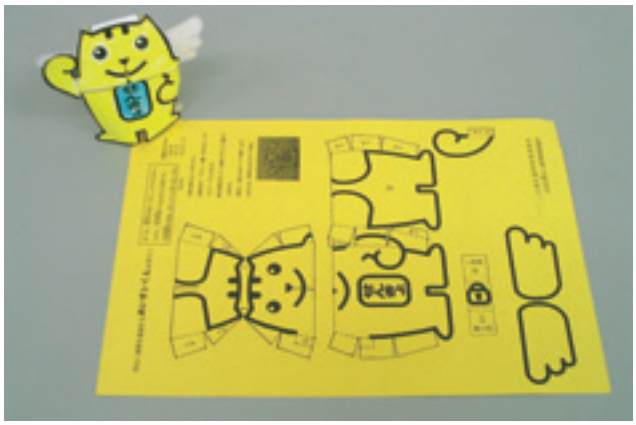
協会からのお知らせ

「啓発資料・資材写真館」について

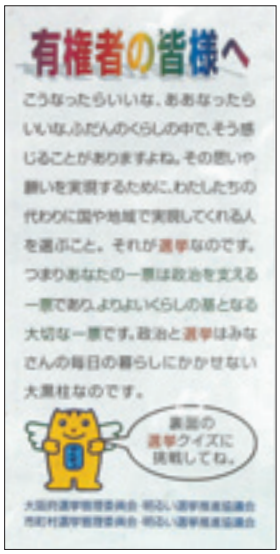
明るい選挙推進協会は、協会のホームページ内に「啓発資料・資材写真館」を設けて、各地の明るい選挙推進協議会・選挙管理委員会が実施された街頭啓発活動の様子や作成された啓発資料・資材を写真で紹介しています。

順次、内容を充実させていく予定で、１月には東京都大田区明推協・選管が考案したペーパークラフト「厚紙で作る明るい選挙のめいすいくん」、大阪府明推協・選管が作成した「選挙のめいすいくんの携帯電話クリーナー」などを新たに掲載しました。

写真、資料のご提供をお願いします。



▲ペーパークラフト



▲携帯電話クリーナー

もくじ

新しい波 …… 2
初夢に託して
仙台市明るい選挙推進協議会会長
渡邊 勝さん

特集
参加意欲を高める研修の意義と効果 …… 4

まんがでわかる明るい選挙
地位利用による選挙運動の禁止……12

ステップアップ!「話し合い学習」活動
積極的にアイデア、意見を出そう
……14

データ
投票に対する考えと投票傾向……18

協会からのお知らせ……19

編集・発行●財団法人　明るい選挙推進協会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門2丁目1番1号
☎ 03(3560)6266・6267
FAX 03(3560)6268
http://www.akaruisenkyo.or.jp/
akaruisenkyo@mua.biglobe.ne.jp

編集協力●株式会社 ぎょうせい

※次号は2・3月合併号とし、3月発行となります。

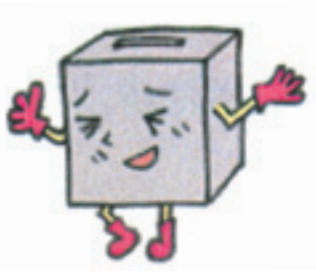
読者の皆さんからのお便りをお待ちしております。
本誌へのご意見、ご要望、質問等お寄せください。
お便りには、住所、電話番号、氏名、年齢をご記入のうえお送りください。

選挙のめいすいくんが紹介する、各地の選挙啓発キャラクター

岡山市

岡山市の明るい選挙マスコット

センカンちゃん



「センカンちゃん」

センカンちゃんとなかよしの
小犬「チャチャ」

- センカンちゃんは、投票箱からできています。
- そうです、センカンちゃんは投票箱から誕生したのです。
- どこから来たのか？何歳なのか？まったく謎です。
- そんな謎だらけの彼（彼女？）ですが、選挙に対する熱心さは誰にも負けません。今日もどこかで、なかよしの小犬の「チャチャ」といっしょに投票の呼びかけをしていることでしょう！

表紙の紹介

ハイアングルから見下ろした構図で、真ん中の人物が拳を力強く握りしめ、ポスターの鑑賞者と視線が合うように描かれています。「大切な一票」という標語との組み合わせにより、しっかりとした意志を持って選挙に参加することの大切さを訴えかけてきます。緑の葉を少し画面に入れるなど画面の構成にも細かい配慮がなされています。

（審査評）

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
村上 尚徳

（選挙　平成一六年一二月号より転載）

文部科学大臣・総務大臣賞作品

明るい選挙啓発ポスター
平成16年度

明日 智恵美さん
愛媛県立西条高等学校1年